

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

語る西田哲学 西田幾多郎 談話・対談・講演集 書肆心水
SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

語る西田哲学
目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

I

鎌倉雑談 〔1〕

〔2〕

人格について 23 19 13

時と人格 29

Coincidentia oppositorum と愛 33

宗教の立場 37

伝統主義に就いて 42

ベルグソン、シェストフ、その他——雨日雑談

東洋と西洋の文化の相異 63

西田幾多郎博士との一問二答 (対談・三木清) 53

ヒューマニズムの現代的意義 (対談・三木清) 80 69

人生及び人生哲学 (対談・三木清) 88

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

II

純粹経験相互の関係及び連絡に付いて	
私の判断的一般者というものの	
生と実在と論理	115
私の哲学の立場と方法	133
実在の根柢としての人格概念	108
行為の世界	175
現実の世界の論理的構造	
現実の世界の論理的構造	265
〔2〕	203
〔1〕	
歴史的身体	301

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、底本には岩波書店版『西田幾多郎全集（新版）』第十二巻（二〇〇四年）、第十三巻（二〇〇五年）、第二十四巻（二〇〇九年）を使用した。

一、本書では新仮名遣い表記とした。

一、本書に収録したテキストは口頭によるものの文字化があるので、原典の表記保存の必要性は比較的低いと考え、送り仮名は読みやすいように加減し、現今漢字表記しないことのほうが多いものは仮名で表記した。仮名表記に置き換えたものはこの凡例末尾に列举した（送り仮名と活用語尾は代表例）。

一、「」は本書刊行所による補註である。

一、踊り字は「々」のみを使用し、「」は「々」に置き換えた。

一、漢字は標準字体を使用した。（例 翻→翻）

一、人名や片仮名語につけられている「」は外して表記した。

一、ギリシア／ギリシャ、根柢／根底などの表記ゆれについては、各テキストの範囲内においてのみ表記の統一をはかった。
一、「ヨニバーサル、スピリット」のような読点は中黒点に置き換えた。

一、句読点の欠落と見て差し支えなきそなところに句読点を補い、また句点であるべき読点を句点に、読点であるべき句点

を読点に置き換えた。

一、振り仮名を補つたところがわざかにある。

*

仮名表記に置き換えたもの——雖ども（いえども）、孰れ（いづれ）、苟も（いやしくも）、所謂（いわゆる）、印度（インド）、於て（おいて）、於る（おける）、斯かる（かかる）、嘗て（かつて）、硝子（ガラス）、希臘（ギリシャ）、基督（キリスト）、斯う（こう）、此・此所・此処・茲（ここ）、此の（この・かぐの）、是・此れ・之れ（これ、書き（さき）、扱て（さて）、併し・然し（しかし）、而して（しかして）、加之（しかみならず）、而も（しかも）、乃ち（すなわち）、其奴（そいつ）、其所・其処（そこ）、其（その）、抑も（そもそも）、夫れ・其れ（それ）、度い（たい）、啻に（ただに）、仮令（たとい）、独逸（ドイジ）、何う（どう）、所が・処が〔接続詞〕（ところが）、所で・処で〔接続詞〕（ところで）、とに角・兎に角（とにかく）、何んな（どんな）、尚お（なお）、乍ら（ながら）、勿れ（なかれ）、仏蘭西（フランス）、亦（また）、儘（まま）、寧ろ（むしろ）、六ヶ敷い（むつかしい）、若し（もし）、齋らす（もたらす）、固より（もとより）、矢張り（やはり）、露西亚（ロシア）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

語る西田哲学

西田幾多郎談話・対談・講演集

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

I

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

鎌倉雑談

〔1〕

一九三六年『中央公論』（第十号）に掲載。

私がこれまで述べて來たいろいろな考えがどんなところから起つてゐるかということを考えてみると、それにはずっと私の若い時へ返ることになるが、何でも物事を根柢から考え尽してみたいというような気持が早くから私にあつたようと思う。つまり、何かあやふやでなくしっかりとした明白なものを把えねばならぬというようなことを考えていた。これは哲学から教えられたのではない。哲学を学んだのはずっと後のことだ。それとは無関係にはじめからそんな気持が私にあつた。

何か仮定によつて成り立つ考え方がみなふたしかでいけないとすると、あとは直接なものということよりもほかなくなる。そこで考えはじめたのが、純粹経験とか直接経験とかいうことなのだ。フエヒネル「フエヒナー」と言うと、あの有名な物理学者で中年に俄かに眼を患つて物理をやめてから哲学や心理学の畠で異色ある著述をした人のことだが、この人にも同じような感想がある。何であつたか忘れたがこんなことを読んだ。ライプツィヒの公園でベンチに腰かけて虹の翅音を聞いたり蝶の舞うのを見たりしてうつとりとしているとき、ふとこの情景がそのまま世界のほんとうの姿だということを考えついたという。これこそ世界の昼というべきだのに、物理学はそれは見ようとしないで物体とか運動とかいうだけのものを作つて考へてゐるが、これは夜の景色（Nachansicht）にすぎまい。何かそういう語を標題にした本で、たしかその冒頭にこのことがあつた。私の考えはじめもそういうことだつた。まだ高等学校の生徒だつたころ一日金沢の町を歩きながらふとそんな気持に衝き当つたのだが、今でもその時のあたりの様子などはありと想ひ泛べることができる。それが大体今の精神でもある。私の考えがいろいろ變つたように人も言い、實際そうかも知れぬが、しかし、このことだけはすこしもかわつていない。そういうことがまず、「善の研究」という書物の

骨子になつた訳だ。あの書物の序文に、我があつて経験があるのではない、経験があつて我があるのだ、ということを書いたが、これも何でもないことのように思う人もあるかもしれないが、ここに私の思想の要があるので、今でもそれはそのとおりである。

それならそのときから今までどうして來たかと言うと、この直接な明白なと私に思われるものが幾度か變つて種々の形を取つて來たことになる。

はじめは、そういう直接な純粹経験と謂われるものが内省或いは自己一個の体験に傾きいわゆる心理主義に近かつたようと思う。しかし、それも後になつて心理主義論理主義の是非が喧しくなつてからそう思えたことで、その当時心理主義が私に影響して私をこんな考え方へ駆つたのではもちろんない。しかし、そのころは恰度ジエームズなどを読んでいたときだから或いはこの人の考え方などが私をひそかにうしろから支えているようなことがあったか知れぬ。

そのころ前後して、ベルグソン、リッケルトなどを読んだ。

ベルグソンはどちらかと言うと都合のいいことばかりであつた。何も反撥するものなどはなかつた。それは今も同じで、殊にあの文章や考え方にある芸術家らしいところがいつまでも私の同情を惹くものらしい。

しかし、リッケルトの論理主義は私の純粹経験の考えにとっては何かと勝手の悪いところがあつた。と言つてこの言葉に全く耳を藉さぬという訳にもよかなかつた。そこで、私のもとからの考え方を守りながらこの批評にも耐える工夫をしなければならなかつた。私がフィヒテに就いたのはその為なのだ。フィヒテと一脈相通ずるところのあるマールブルク派の思想もやはり私には味方のような気がしていた。

ところが、フィヒテを何処までも追つてゆけば形而上学へ入つて行く懼れがある。というのは、フィヒテに隨いて歩んだシェリングやヘッゲルのあの行き方が私に憚られたのだ。のように現実を離れては私にはやはり困るので、私の純粹経験はそれではいけない。やはりどこまでも個別であると同時に一般でもあり、事実や経験を捉えていると共に論理の轍わだちにもちゃんと乗つていなければいけない。カントで言えば *Bewusstsein überhaupt* 「意識一般」というようなものでなければならぬ。そういうこみ入つた経緯から私の「自覚に於ける直観と反省」という書物は生れたものだ。この自覚というのが私の求めていた直接なもの新しい名であつたのだ。この書物にはそのころの私の心の葛藤がすみ

ずみまでここまかに写っている筈である。私が求めたものとはまだどこかびつたりせぬようにも思われたが、とにかくそういう立場に立ってひととおり触れるべき問題にも触れ、その結果が「意識の問題」、「芸術と道徳」というような応用を生んでいる。私もここで一段落が来たようにも思い、とにかく輪廓を描いてみたような気がした。

ところが、私はやはり私が懼っていた方へ幾歩か進んで行っていたらしい。フィヒテがしらずしらず私を縛っていたらしいのだ。「自覚に於ける直観と反省」の結末が神秘思想のために震んでいるという批評もあつたが、今にして思えばこれがそのころ私の思想の特徴のあるものに当つていることを認めないわけにゆかぬ。体験、内省、神秘思想、こういうものがこの期の私の思想の免れない彩であつたかもしだぬ。

私の眼がはじめてギリシャに向つて開かれたのはこのときである。私も何か満ち足りぬ思いでいつか私の旧い課題たる直接なもの明白なものの探求にまた手を染めていたのだが、そういう私にギリシャが教えてくれたものは實に貴重なものであつた。

ギリシャの哲学者が見たものは、近代人の言う物質ではない。さりとて精神でもない。謂わば、精神といいながら精神ではなく、物質といえどそれが決して物質に似ない。それでしかもロゴス的な、つまり直接明白であることを失わないものである。古代には我というものはどこにもない。どちらかというと、近代人の考えはじめたこの我ということは人間の思想を不用に複雑にしたかもしれない。古代人の経験ということを考えれば、それはそういう我のない経験であろう。これが私の求めたものに似ているという感を抱かせたのは言うにも及ぶまい。私はここでプラトンのティマイオスやアリストテレスのデ・アニマから「場処」の考え方を得た。私の遍歴もこれで目的地に近づいたような気がした。もちろんこれから先どんな運命が私を待つて居るかしれないけれども。私がギリシャ人とともに見たものを私は「歴史的実在」と考えたのだ。もし何か時間を超えた永遠不变なものとギリシャ哲学の実在を見るなら、私の考えはむしろその逆だと言つた方がいい。歴史的実在はそういう静ではなく却つて動である。謂わば、ギリシャ哲学の形相ではなく質料の方に向つて私は実体を求めたのだ。旧く純粹経験などと云つて長い間ねらつて来たものがこういうことになつた。

近代唯物論とはすぐいっしょにもなるまいが、さりとて何等かの意味において我というものが基になつてゐる主觀

主義と取られても困る。ギリシャには主客の対立などはないのだ。いったい、ギリシャには色々のものが芽のままにあつた。それが近代に枝葉まで茂り尽してしまったギリシャへ復つてゆくというのが私には面白い。すべてが備わっているなどとはむろん言えまいが、しかしましたそこに自ら諸方へ通ずる途があつたとも思う。私はヘラクレイトスなど面白いと思う。

具象的に、形によって考える、直観的に考える、というギリシャ人の考え方にも、何となく私に親しまれるものがある。私は幼時幾何学が代数などより好きで、殊に解析幾何学のように数式が一定の形になつて出て来るのに深く興味を唆られたものである。何でもみなこういう風に掴まねば気がすまない傾きがある。よく、そういうことがすこしもはつきりせず、ただいわゆる論理だけで言葉を辿つて考え進んでそれで満足して居る人があるが、私はそうではない。

これで私の思想の生い立ちもほぼ判つてもうらうと思う。いま「歴史的実在」と言つているものが私の旧い課題に対する求め求めた解答なのだ。

それなら、どうすればそういうものが見えるか、つまり、日常の私達がどうすればその歴史的実在に触れ得るか、ということになつて来るだらう。

が、この「歴史的実在」というものは実は我々の日常の行動的生活そのままのことなのだ。日常といふようなことを言えば、ハイデガーのことを考える人もあるらうが、眞の日常といふのは uneigentlich ではなく eigentlich 「本當、本来」のものだ。

人間の行為といふものを考える場合には意志といふことが先に来るのが普通だらう。その意志の考えようにもよるが、外界と何のつながりのない全くの内のものだけで行為は起りようがないので、それだけを考えても行為といふことはわからない。これを理解するには、その外への結果についても考えなければならない。逆語めくが、そういう結果が実は行為を起すのである。行為は外から起つて来る。しかし、單に外だけを見るのではやはり尽していないのであって、その外が内であり内が外であるところに行行為の真諦がある。全く内から行為が起るようでもそれは外から起るのであり、それならすべて外かと言うと、その外が内となるといふことがないと行為はあり得ない。

SAMPLE
shigenishiShinsui.com

直観ということもそういう日常の行為につれて行わることで、こちらで私だけが見るのはなく、実は向うから謂わば物が見るのである。

古語に平常心これ道ということがあるが、これがいかにもそういうことを考える私の気分を穿っているような気がしている。道などといっていろいろに考えたり言つたりしているが平常心ということのほかになにがあるか、と喝破したのだ。もちろんこれを言った人の臆裡のものと私の考えとでは大分隔りがあろうが、しかしやはり何か通じている。そしてよくよく考えると、この何でもないような言葉の蔭には実に畏ろしいひどいものがある。人の生き死にのことがかくれている。私の死命を制するような憎むべき響きがある。なお、この道は知にも属せず不知にも属せずとも言うのだが、つまり私がそれを知るとか知らないとかいうことが何とともにそれに加えないのだ。私が生れるも死ぬるもただそれによるというそういう「それ」の厳存をこの言葉は仄かしているのである。

こう言えば、これが一種の宿命觀であるように取られるかもしだれぬ。が、そういう疑いが起るのはこの「それ」をただ頭でだけ考えるからなのだ。つまり、この「それ」に実体を与えてただそういう風に在るものと考えるからなのだ。禪の修業者のようなものならそういう考え方の上のことには躊躇しないで、すぐにそこへ行ってしまうから心配ないが、論理といふものは却つて一面にそういう隙があるものなのだ。もとより私のすることは理論なのだから、その隙を填めることもせねばならぬ。「弁証法的一般者」というのはそのような孤立する実体の考えに代るべきものであり、「無」はただ無いのではなく弁証法的に動くもの、「歴史的自然」は絶えず生み生むもの、「理性」は受容するのではなく形成する作用、という風に説いていざれもいま言つた「それ」の正体を明らかにしようとしている。決して宿命觀ではなくでない。

しかし、いま日常そのままと言つたから、それならそれを斯く斯くと知つたり言い定めたりするのが全く余計ではないかというような考えも起らう。まことに、日常そのままが真だということなら、私はただこれを放任してそれですんでしまうので、これに更に考慮を加えて冗な言葉を費す必要などがどこにあろう。

そういう疑問は尤もある。まだことは取り出してはつきり言つたことはないようと思う。実はこれについては言うとすることがすこし難しかとも思う。しかし、そう考えてみれば、これまでそのことを全く等閑にしていたのではない。やはりそのことがいつも底にはあつたので、私の書いたものも気を注けて読んでもらえれば判ることなのだ。

こういう風にも言えようか。ものを知るという要求が私にある。その要求も私がほしいままに起したのではない。物が私に知ることを要求している。物が私に知ることをなさしめる。

が、こんなことは十分ではあるまい。ただでは言えないことではないかとも思う。私はこれは宗教に属するものではないかと思う。宗教と言うと何かへんな曲解が伴っている。あらゆる理論の根柢にある宗教の意味を注意することを怠つてはいはせぬかと思う。

も少し言おう。私が今考えているのはこうなのだ。単に物などというものがある訳はない。我に対する物ならやはりどこか我だ。ほんとうの物なら却つて我までその内に含むべきだ。が、その我が物らしくされてしまうというだけでは何にもならない。その含まるべき我はかつて物から峻別された我でなければならぬ。これを更に他から知るということはないから、それに代えて弁証法的自己限定ということを考え、一面を形容して行為的直観などという。

ある日の氏の談話の要を撮む

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

鎌倉雑談

〔2〕

一九三八年『中央公論』（第十一号）に掲載。

私は特に誰を基とし誰に従うということはないが、いまもしライプニッツを振りて云うことにはれば、私の考えはこのように述べることができるかと思う。

ライプニッツは「単子」というもので何でも考えて行こうとした。これは今日の言葉で言えば「個体」Individualという事である。これはライプニッツが窓がないと形容したように全く外と隔絶した内具の性質に随つて変化し運動するものである。ところが、こういう個々別々な単子だけではいけなく、それが寄り集つて或る脈絡を生じた「世界」というものもライプニッツは考えていたよう私には思う。私にはそう考えられる。

元来、この個体の考えはアリストテレスに始つたものである。プラトンなどにはまだこのことはなかつたので、アリストテレスが始めて言いだしたのである。アリストテレスの基をなす考え方というものはみなこの個体の考えを精しくすることに集中されているようと思う。実体、基体、本質、エネルギー、などみな個体の定義に誘い出されて起つた考えであろう。しかし、アリストテレスの個体は単独の個体である。一つの個体である。その一つ一つの個体が互にどんな関係に立つかということまでは考え及んでおらない。つまり、世界ということがアリストテレスにはまだ説かれておらない。

ライプニッツの単子はこれはアリストテレスから來るものであることは疑いない。しかし、ライプニッツはアリストテレスに加えてさらに、この単子の相集つて成り立つべき世界について考えている。これはライプニッツの新しい添加と言つてよからうと思う。つまりライプニッツの考えたのはただの単独の個体ではなくて、個体と個体という二とへ考えを行つたのである。この相互関係を見くらべながら個体そのものの構想について工夫したのである。单

子に表現 (expression, représentation) のはたらきを考え、またこれを鏡 (miroir) と言つたりしたのはそういうことなのである。各々の単子がそのように表現しているのが世界といふものなのである。あらゆる単子は表現している。つまり、それだけ孤立の個体というものはない。

こういうところから私の考えに結びついて来る。個体といふものは必ず他と対立するものである。対立するが故にそれ自身がよく個体たり得るのである。そこで、個体といふものを考へるには、それと表裏してその関係といふことが離せなくなつて来る。個体はもとより各々独立なものである。まさにアリストテレスがその意義をみとめて精しく考へたようなもので、そういう個体の考へはものを見るにぜひなくてならぬものである。しかし、各々がいよいよ独立になると同時に、この独立をたしかにする両者間の関係が明らかになつて行くのである。個体間の独立と関係といふものは相即して不離なものである。このような関係の一定なものをたよりに世界が彷彿されるのである。

ライプニッツはこの世界を築き上げるために予定調和といふようなことを考へ、つまりは神に帰しているのだが、この仮定は私は必ずしも借りぬでよい。個体の独立といふことと、その独立なる個体の各々がそれぞれに全体を写すということと、この二つを認めれば足りる。

私の考へによれば、個体といふものは、ライプニッツの云う如く單に、写す、或いは、表わす、といふ性質だけのものではなくて、働くといふことがなければならないのである。そうして個体は働き合うことによつて私のいつも云う歴史が生ずるのである。この歴史といふ言葉はそのように働き合う個体といふことを表したものであつて、普通の用語例での歴史といふのと直ちに同一ではない。私の歴史といふのはさきにいつた世界なのである。私は個体を働くものと考へるよう、そういう個体の多くの間に成り立つ世界も新しく歴史と云つてみるのである。個体は働いて歴史をつくり、歴史はまた個体を生む、というのが私の考へ方なのである。

そういう基のところから、それならどうしてすべてが成り立つて来るかといふと、まず物質界であるが、一つ一つに見られる個体は時間的連続的と云つてよからう。世界といふのは、そういう個体の集つて生じた関係で、空間的不連続的といふことができる。この空間的な関係において見られた個体といふものは一つの「形」(Form) として現れるのでなければならないと思う。物理現象は各々そういうまとまつた形をあらわしていると思う。例えば量子といふものが私にはそう考へられるのであって、電子には時間のみがありこれは個体である。また光といふものはこれは媒体

である。この二つが一つになつて「形」として現れたものか量子なのだと思う。量子というものの意味は非連續といふことなのだと思う。とにかく量子ということのイデーはそういうことになるのではないかと思う。私は量子の考えは単子の考え方と通うところが多いようだと思つてゐる。量子論はニュートンの物理学よりライプニッツの形而上学の方に近いかも知れぬと考えたこともある。ライプニッツの単子は人格を持つように工夫されているのだが、そして量子論は全く物理現象の考察から生れたものだが、それでもよほど類縁がある。ボアなどは量子の性質を考えるのにしきりに有機体を引き合いに出している。その物質の個体が、自から形を作る働きを持つようになつたものが生物の細胞である。この生物現象における個体は、物質の個体の如き單なる普遍的一般的なものではなく、個別の特殊的である。

こうして物質界と生物界とでそれぞれ異なる個体の性質はあきらかになる。物質界においては、個体は量子であるが、これには空間性が勝つてゐる。普遍性を帶びてゐる。これが生物の細胞になると普遍性が薄れて個別性が強まつて来る。強まつて來てもまだ普遍性が残つており、物質と離れきれずこれから拘束を蒙つてゐる。この傾向をすすめると、個性が確立し、自発性が昂まるわけである。そうして現れるのが個人である。個人は個体性の極まつたものである。ところが、さきにも云つたように、個体性は個体間の相互關係によつて却つて充実するものである。独立は他との関係によつてはじめてあり得るもので依存しつつよいよ自由なのである。つまり、個体性の極まつた個人には個性と同時に一般性がある。かようく普遍性によつて個別たり得るというところに、個人というものの真義がある。この個人を生かす関係なるものが、社会である。個人は同時に社会なのである。

この社会というものは、種々雑多な見方があるが、その一つを云つて見れば、これは單に関係だけでなく、発展というものを含んでゐる。

この発展ということは社会にだけあらわれる特徴ではなくて、やはり物質界にも見られるものだと思う。物質界にもあるものが次第に顕著になつて來る訳なのである。私がいつも云つてゐるように、物理現象は作られたものがまた新しく世界を作つて行くといふような仕組に解釈せらるべきものである。つまり、一つのコンステラチオン〔状態〕から他のコンステラチオンへ移るといふのが自然におけるものとの起りようなのである。ランケ (L. v. Ranke) がその著 (Über die Epochen der neueren Geschichte) 〔近世史の諸時代〕の序に、出来た (geworden) ものがさらに他のものに成り行く (werden) のが歴史だ、と説明しているが、これは直ちに自然界の物理現象にも当嵌るもので、その根基

は私のかねがね云う、非連続の連續、或いは一と多との弁証法的世界、というものにある。そういう考え方からすれば最近の物理学の新傾向とも自ずから契合するところがあるようと思う。すべての変化がこういう仕組みのもので、つまり発展のわけなのだが、物理現象はこの作られたものから作るものへの移り行きが一定で一般的なものである。そういう一定の発展ということを目やすく自然というものが認められるのである。この発展が特殊になれば生物現象が現れる。生物現象でも作られたものが作るので、このときは二つのコンステラチオンは肉体という同じ一つのものになつてゐる。この肉体に見られる発展は物理現象におけるもののように普遍性一般性がない。しかし、生物のこの発展は一步一歩と進められるものであることがよく分り、物理現象のときのように特に解釈せないでもすむ。さて生物には発展はあきらかになって來ているが、まだ物理現象の拘束があり、自由ということは考えられない。ところが、その生物の状態からさらに一步進めると作られるものが作るものに一つ一つ対立するようになる。つまり作られるものは道具となつてその度に作るものから離れて行く。かように、道具ができると同時に個人が誕生するのである。個人は自由である。即ち、作られるものはその度に手離され、作るものが自由たり得るのである。手離された道具は特にどの作者に属するというのではなく、それだから却つて誰にも属し、共有物となる。こうして社会が現れる。

これを要するに、すべては一と多との弁証法を以つてつらぬかれており、物質現象においては作られるものに即していく空間がその主な特徴であるが、生物現象になると時間が萌しあし空間もまたとともにある。それが社会になると時間の優位が確立し発展というものが著しい勢いとして眼に映るようになる。もしぞれ文化史の遷移もこの型を以つてその意味を推すことができる。——文責在記者——

こういう様に云えども、個物というものから世界を考えると思われるかも知れぬが、私はそう考えるのではない。私の考えは世界を多と一と相互否定の矛盾の自己同一として、作られた物から作るものへと、創造的に考えるのである。私の考えはモナドロジーではない。今は唯個物的多の方から話して見たまでである。私の考えには逆に全体的一から個物を否定する一面があるのである。委細は「思想」八、九月号の私の論文を参照せられたい〔歴史的世界に於ての個物の立場〕。のちに『哲学論文集第三』に収録〕。私の談話の要点をかかれたこの原稿を一覧してこれだけのことを附記して置く。

SAMPLE
Shojuin.com

人格について

一九三二年九月九日の丁酉倫理会における講演記録。一九三二年『丁酉倫理会 倫理講演集』（第三六一号）に掲載。

近来、人格と云うことに就いて少しく考えたことがあるので、そのお話をし、皆さんのお話を受けたいと思う。人格と云うものはどう云うものか。人格体験と云うものは誰でも持つて居られるので、事實上誰も知つて居ると仮定して、それをどう云うように解釈したら最もよく人格と云うことの意味が明らかになるか。そう云うことをお話しようと思う。

先ず、私と云うものを考える。この私と云うものははどう云うものであるか、それには色々の考え方があるだろうと思う。普通に言う心理学的に私と云うものを考えれば色々の説が出る。いわゆる経験科学的な私と云う考え方もあるだろう。すると、そう云うものが何か事実的なものに結びついて私と云うものを考へるのであるが、その事実的なものと云うのは第一には肉体と云うものを考へている。それからなお深く行けば自然界と云うものが結びついて居る。即ち我々の自己と云うものは大きな自然と云うものと結びついて自己と云うものがある。斯様に考へる。個人的自己と云うものは個人的自己として存在して居るのでなしに、何か大きなものの一部として存在して居る。こう云う考え方である。

しかしそう云う考え方を段々徹底して行くと、自己と云うものが、自己の意識外からして自己と云うものが決められるものであつて、その自己の本として肉体的のものが考へられる。それからなおもつと深く考へれば自然と云うものが考へられる。斯様に自己と云うものを考へて徹底的にその考へを貫くと云うと、これはマテリアリズムのようなものになつてしまふので、我々の本当の自己、パーソンと云うものは考へられないようになるだろう。それと全く反

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

Ⅱ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

行為の世界

一九三四年一月五日、六日、七日の京都府立教育会館における講演の記
録。一九三九年『哲学の基礎問題』（信濃哲学会刊行の非売品）に掲載。

これからお話しをいたしましょう。私の書物に書いた事の極く大要を話して見ようかと思う。で私の今のやつている事の目的は、我々の実在界と考えているものはどういうものであるか、それを論理的に基礎附けようとの企てである。実在界と考えられるものは色々に考えられている。一番普通にこの世界は物質の世界と考えられる。自然学者、物理学者はそれよりすべてを説明せんとする。又この世界は一つの方向に向って進んで行く一つの生きたものとすれば、これは生物界と考えられる。合目的的とも考えられる。しかし又この世界は単に生物の世界としては考えられない。人間の世界である。社会的・歴史的世界である。そういうような世界は根本的にどういうものであって、色々の世界の考えがそれからどういう風に考えられて行くか。これ等の問題を論理的に明らかにして見ようというのである。

それはなぜ論理的にというか。

これ迄の哲学の考えは或いは主観の上に立つてものを考えるとか、客観的の立場から考えるかの何れかの立場から考へてゐると思う。主観、客観をわかり易くいえば、心を中心として考へる唯心論、物を中心とする唯物論の立場、そういう風に主観、客観の対立をゆるしておいてそれらものを考へようとしていると思う。それでは本当の主観、客観の根柢からしてこの世界を考へることは出来ない。主観よりすれば唯心論となつて本当の客観が考へられず、又客観よりすれば主観に対立した客観を考へることになつて、本当の主観、精神界を考へる事は出来ない。今日のマルキシズムも昔の唯物論とはちがうが、それは客観主義をとるものであつて、我々の精神界をも取り入れる事は出来ない。無論それなら昔からの考え方で主観、客観の一方の立場ではなく、主観客観を越えた立場から考へた哲学というものは

ないかというにそれは随分ある。しかしそういう哲学であってもどうも客観主義になつてゐる。我々の心といふようなものはどうしても客観的には考えられぬものである。でこれ迄の主観、客観を超越した立場からものを考える哲学でも我々の心を考える事は出来ない。それで私のところうとと思う論理的の立場はそういうような主観客観の対立といふようなものを越えた立場であつて、然も我々の心の世界をもその中に含み得るような立場である。

今迄の多くの哲学の立場は、主觀客観を対立させ、これを統一しようとの立場である。これではいけない。主觀客観の対立を超えた立場から考えねばならない。論理的といつても普通の論理は、我々のものを考える形式であつてそれは主觀的である。だから論理というも今迄の論理ではそうした事は考えられない。近頃私の考えている論理の立場とは、論理といつても普通の論理ではない。今日論理といふものは、我々のものを考える形式になつてゐるが、本来はやはり実在そのものの自分自身を表現する道であつて、論理といふものは実在と離れないものである。だから論理は真理の学であり、真理は実在から離れては考えられない。ヘーゲルは「眞なるものは実在である。」といった。即ち論理は本来そういうものである。今日の論理はギリシャから始つたものであつて、アリストテレスの論理学と形而上学とは密接の関係があるが、それを詳説するのは今日の問題ではない。以上はなぜに論理的にものを考えるかの理由をいつただけに過ぎないのである。

我々の実在界といふものはどういうものであるか、でこれ迄色々な哲学で考えられている実在界は色々あるが、然し要するに我々が外に見ている世界だということが出来る。つまり自分といふものは、その世界の中に入っているんじやなくて、自分はそれを自分の外に見ているのである。つまりいえば知識の対象界、例えれば物理学者の考えているような世界、物質界は我々に対立しているものである。我々が外に見ているもの、まあ物質から我々が出るというのもそう考へる迄であつて、それを考へる私は物質ではない。社会とか歴史といふものも、それを自分の外に見ている以上は、やっぱり知識の対象界である。何年か以前、日本でも盛んであつたドイツ西南学派などの歴史によつて論ずるところも歴史を知識の対象界として考へてゐる。そういう風に我々の外の世界として見ている世界は本当の実在界ではない。そういう世界は我々の自己といふものによつて、主觀によつて構成された世界であるということが出来る。カント哲学もそういう考え方である。要するにカントの哲学では我々の主觀によつて組立てられた世界として見ているの

行為の世界

であつて本当の実在界でなくなる。

本当の実在界は我々が中にいる世界でなくてはならぬ。自分を包んでいる世界でなくてはならぬ。自分がその中にいる世界とは自分の知識の対象界ではなく、自分がその世界に生れ、働き、死んで行くものでなくてはならぬ。それが本当の実在界と考える事の出来るものである。そういう世界は論理的にどんなものであろうか。

そこで一体論理的に実在界はどういうものであるかという問題に入つて行こう。論理的に実在はどういうものかを哲学的に論じたものは、ギリシャの折学である。ギリシャの哲学について話して見よう。プラトンの哲学で実在をどういう風に考えたか。ギリシャの哲学は始めは自然哲学——自然哲学というも今日のとはちがうが——であった。自然はどういうものから出来ているかを論じた。例えば哲学史の始めに出て来るが、ターレスは世界は水から出来ているといった。その次に色々人が出て来ているが、ソクラテス時代になつて人間自身に帰り、自覚的になり、懷疑的になり、始めて論理というものが出で來た。ソクラテスの時代にはソフィストが出て来て真理の存在を否定した。真理といふものはないものだ、真理は鉢々の主觀に過ぎないといった。ソフィストのプロタゴラスは有名な人で、人間は総てのものの尺度 measure だといった。人間によつて真と善とがきまるのである。ソクラテスはこれに対して、真理は誰れでもそう考へねばならぬ、永遠不変のものであると主張した。

プラトンはソクラテスより發展し、一般的なるものは実在であるとした。それがプラトンのイデアの考へである。例えれば火が熱いという事も熱いというイデヤがあつて、ここにある特殊の火がイデヤを分取して熱いということになる。又人間というものがある。一般的な人間があつて、それを分取することによつて甲乙という特殊な人間があらわれる」と考へた。始めに一般概念があつて、一般概念を個別化することによつて、そこに特殊なものがあるとする。例えればここに馬がある。この馬は馬一般を特殊化して特殊的なこの馬となる。一般（イデア）が特殊化されることによつて個々のものがあるというのがプラトンの考え方である。だから眞の実在は一般的、永遠的なものである。こういう論理はプラトンに始つたものである。この論理は一般的なものがなければ考へられぬのである。又あるということも他の関係においてあるのである。唯ものがそれだけであるのでは、あるということはいえない。例えば A、B の関係によつて A があり B があるのである。したがつて A、B があるにはそれを含んだ一般的なものがなくてはならぬ。何ものがあるには一般的なものがなくては考へられない。プラトンは主にそういう所を考えたのである。

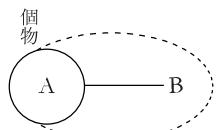
しかし又そういう風に一般的なものを主とするという考え方と逆に本当の実在というものは一般的なものでない。一般的なものは、物の性質とか、その物の働きとかいうものであつて、一般的なものは物に属してあるものである。一般的なるものだけあるのではない。一般的なものは物に属してあるのだと考えが出来ると思う。丁度プラトンの逆の立場を取つたのがアリストテレスである。このアリストテレスの考えは余程もつともな考え方である。一体ものがあるといつたつて、唯一般的なものだけであるとはいえない。却つて反対にあるものは個物的なものでなくてはならぬ。他のものに属してあるものはそれは自身に独立しているものではない。それ自身に独立しているものは、一般的なものでなく唯一のものでなくてはならぬ。例えば熱い、は火の有つている性質である。熱いとか、寒いとかいうのは、個別的なものに属しているものであつて、それだけで抽象的に一般的なものがあるのではない。馬というても、この馬、その馬があるので一般的な馬があるのでない。馬はそれ等の馬に共通な性質である。そこでアリストテレスは論理的に考えて、実在はどこまでも個物的なものでなくてはならぬとした。それがアリストテレスの有名な実在の定義である。実在は主語となつて述語とならぬものであると考えた。

「*火は火*」と云えば、判断の形式を示すのであって、この水は冷い、この火は熱いと判断すればこの形となる。この水この火が主語である。*A*が主語である。主語となつて述語とならぬものとは何か。すべて一般的なものは述語となる。熱い、冷い、は一般的なもののである。馬といつても一般的なものならば述語となる。しかし一あつて二なきソクラテスはソクラテスで他のものではない。プラトンはソクラテスだとはいえない。ソクラテスがプラトンだともいえない。それは他の何ものの述語となることも出来ない。個物というものは主語となつて述語とならないもの、それが本当の実在である。即ち自分自身で存在し、他のものに附屬して存在しない。実在というものを論理的に我々はこうしてきめることができ。これはアリストテレスがギリシア時代にいつたことであるが、しかし今日でも我々が実在を考えるにはやっぱり何か個物的なものとして考えねばならぬと思う。このコップといえば唯一のものとしてあるのである。何か他のものにくつづいてあるといえれば他のものの性質或いは力であつて他のものによつて成立つていねばならぬ。例えれば物理学において——今日の物理学は根柢的に変つているが——昔の物理学はアトムとというようなものを考えた。物を分析してもはや分析出来ない最後のものをアトムと考える。このアトムが結合して実在となる。最終の実在と考えるものは何等かの個物というようなものである。近頃でも最後の物質はエレクトロン（電子）というも

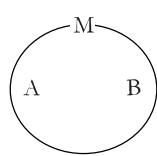
行為の世界

個物というものは一体どういうものだろうか。個物は唯一つあるもので、他によって存在するものでなく、自分自身で存在しているものである。近世哲学のデカルト学派のサブスタンスの定義は個物の定義である。例えばスピノザのエチカの一番始めに実体の定義についていている。自分自身で成り立ち、自分自身によつて存在し、自分自身によつて理解されるもの、これが個物である。そういう個物は果して他と関係のない唯一のものとしてあるものかどうか。ものがあるということは何かの関係においてでないとあり得ない。他と何も関係がないとそれはないも同じである。ものがあるということは何か他との関係においてあるのである。コップがあるということは私が見るからあるのである。目との関係においてあるのである。又手との関係、飲むという関係、或いは机の上にあるという関係においてあるのである。一つのアトムがあると考えるのも他のアトムがあると考えるからあるのである。あるということは他の全体と関係を有たねばならぬ。総てのものと何か関係を有たねばならぬ。そうでないと唯一のものだとはいえない。物理的に一つのアトムがあるといえればそれは世界全体と関係を有たねばならぬ。そこでこのものがあるといえれば既に矛盾を含んだものだといえる。他との関係のみだといえればものはない。又関係がなければあるといえぬ。そうすれば我々の考える実在界というものはどういふものか。アリストテレスの如く個物的なものでなくてはならぬ。ところで一つきりで他との関係がなければ個物ではない。他との関係を有つことによつて個物となるのだから矛盾である。

この世界は個物と個物との集りから成ると考えられる。個物というものが無数にあって、それが関係し合つていると考えられる。これはライブニッツの考へである。ライブニッツはアリストテレスの考へを受けつけ、この世界は無数の個物から成立つてゐると考えた。アリストテレスはこの世界は唯一独立な個物であると考えた。それを徹底してライブニッツは関係というものは考えられないとした。それだから諸君が哲学史をごらんになればわかるように予定調和などという仮定を持つて来て説明したのである。しかし実在界を考へるには実在は個物的に考へねばならぬ。個物は他の個物と対立的に考へねばならない。例えばA、BにおいてBがAの現れならBはAの中へ入つてしまふ。Aの中へ入るとAのみとなりAも消えてしまわねばならぬ。AはBに対立しなくてはならぬ。そうすればBは一つの独



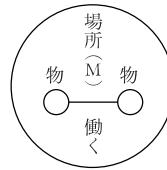
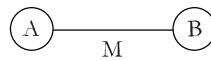
立した個物でなくてはならぬ。例えはAはストーブであると、熱い、重い……というようにそれぞれの性質は皆Aに属している。Aが実在である。Aが一つだと考えると他と何等の関係がない。するとAは消えてしまう。どうしてもAはBに対せねばならぬ。BがAの現れならばAもなくなる。個物が他の一般の現れだとすると対立が無くなり実在するものはなくなる。このように実在というものは矛盾を含んでいる。ライプニッツは無数の個物を考えた、けれどもその間の関係を考えなかつた。そこへ行くと予定調和といふような根拠のない一つの仮定を考えねばならなかつた。仮定は論理的に要求せられるものでないかは他との関係において成り立たねばならぬ。互に独立なものなら又関係することは出来ない。しかし関係がなければ個物ではない。プラトンとアリストテレスに戻つて考えて見てプラトンは一般的なものを実在と考へこれより特殊なものが考へられる。一般が先にありそれより特殊が考へられる。アリストテレスは特殊的なものから一般的なものを考へた。個物的なものは一般的と考へられぬものである。しかし実在にとつては両方共必要なものである。



A、Bが個物であるためにはこれを包む一般的なものがなくてはならぬ。Aが個物であるためにはBと対立せねばならぬ。対立するには対立せしむる一般的なものがなくてはならぬ。一般的限定には個物的限定がなくてはならず、個物的限定には一般的限定がなくてはならぬ。個物と個物というものが成立つには何か一般的なものの(M)の媒介によつて成立つのである。これは矛盾であるが、そこに実在が成立つのである。実在は個物的である。物理学でアトムを考えるにも、アトムはそれ自身独立してゐるものである。しかしそういう唯一つのアトムがあり得るか。そういうものはあり得ない。互に独立したもののが関係し合わねばならぬ。そこに矛盾がある。アリストテレスは個物を考えた。プラトンは一般的なものを考へた。それが結びつくということは矛盾であるが、実在界はその矛盾の所にあるのである。

例えは普通の人は物理的世界を考えているからそれを例にとって話す。この物理的世界において物と物とが働く、独立的なものが互に働くというには何もないのではない。物は空間において働くと考えるものである。しかしMというもの働きによつて、このもの(A)がきまつて来るというでは、このものはまだ独立のものではない。何か

行為の世界



媒介によつてAはBに働くのである。個物によつて一般があると考へねばならぬと考へると共に一般によつて個物があると考へねばならぬ。私の書物にいう個物による一般的限定、一般による個物的限定というのはその意味である。場所とはMというようなものを意味している。個物と個物とがそれによつて関係し、それによつて成立つてゐるものである。プラトンの一般というのは私のいう場所の意味をもつてゐるが私ほどはつきりしていない。これはわかり悪い所であるかも知れないが、これがわかつて貰わねば私のいうことはわからぬ。大切な所である。

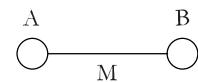
実在は何か個物的でなくてはならぬ。そのものは又他の個物に対さねばならぬ。この個物は絶対の個物で他によらず独立である。物理學のアトムは絶対の個物とは考えられない。ライプニッツのモナドは独立である。ここまで考えたが、絶対に独立であると共に關係せねばならぬという点を考えなかつた。AはBによつてあり、BはAによつてある。互に independent であると共に dependent でなくてはならぬ。それは矛盾である。一体 M といふ measure を入れる時、A が独立、B が独立のためには何か關係させるものがなくてはならぬ。これを結びつけるものとして、A とも独立、B とも独立の第三者を持つて来たらよからうという風に普通考えられるかも知れぬがそれはいけない。A と B とを結びつけるものは A、B に無関係なものでは媒介出来ぬ。A、B は媒介するものの modification (変形) でなくてはならぬ。物は形を有つたもので空間的なものである。例えればコップとビンは空間が媒介する。物と空間とは異つたものでなく、コップが空間的であり、ビンが空間的であるから空間が媒介するのである。A、B を媒介するものは A、B を作つているもの、A、B はその modification でなくてはならぬ。二つの物は空間によつて媒介される。元來二つのものは空間の modification である。一般的限定が個物的限定、個物的限定が一般的限定で互に独立したものが關係しなければならない。個物的なものは一般的なものの modification であったということでなくてはならぬ。

その点をもつと物理学的なもので話した方が直観的でわかると思う。今日では物理学の常識となっていると思うが、物理学の進歩は私のいうようなことを証明していると思う。諸君の習った物理学は、ニュートンの物理学である。ニュートンの考え方には物と物と関係するには力というものを考える。即ち引力というものを考える。引力というものはあって糸で引張っているように考えていたが、この頃は引力の考えはあやしくなつて来た。引力は始めは天体から

考えられたもので、天体はぶつぶつした物であって、その間に引力が働いていると考えられた。星は空間的な extension (拡がり) を有つたものである。しかしこういうことは一体どういうことであるか。物というものは何か形を有つた空間的なものであると共にまた時間的に変つて行くものである。物理学は時間、空間において考えられるものである。 space relation (空間関係) が time relation に変つて行く運動である。段々物理学においては力というものを取つてしまつて、ただその関係だけを考えなければよいのである。ヘルツの力学には力の概念を取つてしまつて mass \rightarrow time \rightarrow space のみである。今日の物理学においてはニュートンの物理学と異り電気が重要なものとなつた。物質は電気だとしゃべりとになった。この考え方の基礎は英國のマックスウェル——その前にファラデーがあるが——である。彼は物質現象をニュートンの様に考えず、物理的空間というものを考え、物理現象を物理的空間の変化と見るのである。

例えば十の charge を有つとは云ふことか。物がいま十の電気をもつてゐるとする。又一つの物があつて、それがもし十の電気なら反撥し、一であると相引く。電気の charge があるとは妙な言葉ではあるが、空間が歪を有つことである。今空間を風呂敷と考へる。その風呂敷をぴんと張つておく時何か歪がなければ物を持って来た所にあるわけである。このホールド [board] を風呂敷に考へればもし風呂敷が歪んでいるごとく、物は転る。これを空間の歪といふ。空間といふものは普通幾何学的の空間を考へるが、これは実在的な空間ではない。実在的な空間は real space で何か働くものである。物が變るといふのは時間、空間的に變ることで、時間的な空間を物理的空间といふのである。これは四次元の空間であるが、普通に人の考へる幾何学的の空間は三次元の空間である。アインシュタインの相対性原理は、四次元の世界において考へたのである。個物的限定即一般的限定、一般的の限定即個物的限定といふことになるわけである。ニュートン物理学においては一般と個物とを個々別々に考へているのである。これを図で示せば、M は力の場 (Kraftfeld) である。個物と個物とが互に限定するといふことは、そこに何が M というものがなくてはならぬ。逆に個物は M の modification である。

個物的限定 (個物と個物との相互限定) \equiv 一般的の限定



元来唯一の個物といふものは成立つことは出来ないのだから個物と個物との相互限定といふことではなくてはならぬ。これは又一般的の限定といふことではなくてはならぬ。これは勿論矛盾である。しかし実在はこの矛盾に成立つてゐるものである。

行為の世界

今物理の世界についていった。しかし本当の個物の世界というものはどういうものか。物理学のいってある個物といふものは本当の個物ではない。個物はどこまでも独立なものでなくてはならない。どこまでも独立なものは、他から限定されない、自分自身で限定するものでなくてはならない。個物的といふものは時間的でなくてはならない。一体時間的なものはどこ迄も他から限定されないものである。我々の自己といふものは本当の個物的なものである。個物といふものは論理的に考えられるが、自己ほど個物的なものはないであろう。独立で他から限定されず自己限定であつて、その自己は時間的なものである。ベルグソンは、「自分は一瞬の過去にもかえらぬものである。これが自分がと思う時には既にそれは自分ではない。その瞬間が本当の自己で、そうでないものは空間的なものである」といつた。あのベルグソンの純粹持続という様なものが本当の個物的なものである。絶対独立で他によつてどこ迄も限定されないもの自己自身によつて限定するもの、そういうものは時間的である。アリストテレスがメタフィジックの中で、「個物は個物から生れる。」といつてゐるがよく個物の意味を表してゐる。もし個物が一般的なものから生れるならばそれは個物ではない。例えば馬なら馬という一般概念に特殊性を加えて個物が出来ると考へるが、これは個物ではない。一般的なものに還元出来るものは個物ではない。机は還元すれば木になる。更に木もエレメントになる。これは一般的なもので、一般的なものに還元出来るものは個物ではない。個物はどうしても個物から出て来ねばならぬ。我々の生命を考えてもそうである。アリストテレスは親から子が生れるのであつて、単に物質からは生命は出て来ない、個物は個物から生れる、といった。時といふものは丁度そういうものである。前の瞬間から次の瞬間が生れて来る。個物は本当はそういうものでなくてはならぬ。

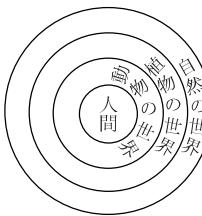
瞬間 瞬間 瞬間

↓ ○ → ○ → ○

それで物理の力といふものはやはり時間的でなくてはならぬ。唯空間だけなら幾何学的である。個物的の意味を有つていねばならぬ。物理的 세계에는時間的性質を有つていねばならぬ。しかし物理的時間はまだ本当の時間的でない。四次元の世界において空間に結びつけられた時間である。ベルグソンは時を流れる時、流れた時（空間的性質をもつてゐる）との二つに分けて考へた。物理学の時は計ることが出来る。例えば時計の針で計る様に時間が空間的関係において見られてゐるのである。その時の上に物理学が成立つのである。物理的 세계においての個物は本当の個物ではな

い。本当の個物は空間的なものでない。

そこで本当の実在界というものはどこ迄も時間的なもの、個物的なものが互に関係する世界でなくてはならない。そこで本当の実在の世界は単に物理的世界ではなく、生命の世界又生きた世界でなくてはならぬ。我々の生命といふものはどこ迄も時間的であり、個物的でなくてはならぬ。で普通に生命という様なものを考える時に生物を考える。そうして生物の世界においてあると考へてゐると思う。それはどういうことであるか。



普通人の考へは世界は物質であつた、それが發展して植物が出来、動物が出来、人間が出来たと考える。宇宙の世界が本当の実在界で、根柢的なもので、それから植物、動物、人間の世界が出来たと考えられる。この考へは余程考へねばならぬ。そう考へると物質から生命が出たと考えられ、これでは生命の起原は考へられない。つまり我々の生命も段々分析して因果関係だけから考へて行くと物理現象に還元出来るが、それから生命がどうして出て来るかはわからぬ。これは単に客観的なものから主観的なものを説明していると同じである。例えば今日のマルキストなどの考へがそうである。マルキストの考へる物質は、必ずしも自然科学的な物質ではないのであるが、しかもなぜに物質が根柢になるかといふ事を明らかにせず直に物質を持って来る。カント、ラプラスなどの宇宙觀のように進化論的に考へてゐる。かかる物質現象からどうして精神現象が出来るかを説明していく。脳髄から精神が出るという様なことを考へるが、生命は何か意味を有つてゐる。世界の根本的なものを考へるもので、歴史的な意味を有つた世界だと考へて始めていえるので、自然科学的な考へからは生命はわからない。ずっと前であるが十九世紀の初頭デュボア・レーモンの七不思議の論文の中に、生命の起原、意志の起原を數え上げてゐる。本当の個物といふものは生命を有つたものである。個物と個物の関係する世界が実在界である。実在界は一応は生命の世界と考えられるのである。それだからして先にいひたA、Bは単に普通に考へる様なアトムではなく、A、Bは皆生命で、生命と生命とを限定するものでなくてはならない。

昨日のつづきをお話しましよう。

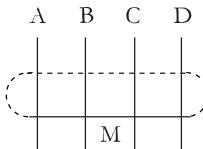
昨日は我々の実在界といふものは、個物的限定が一般的の限定、一般的の限定が個物的限定という意味で、つまり自己

行為の世界

矛盾、矛盾の統一という様な意味において成立っているものだ、ということをお話した。個物的限定即一般的限定といふ言葉がわかりにくければ、わかり易く時間的・空間的と考えてもよい。時間、空間と云えば今迄の考えがくつついているので、それに支配され易いから正確ではないかも知れないが。我々の普通用いてる言葉であるから却つてわかり易いかと思う。私の書物には直線的限定、円環的限定という言葉を用いてるが同じ意味である。個物的限定はものが自分自身を限定して独立であり、個物は一つでは成立せず、AはBに対するのであって、ただ二つのものが並んでいるというのではない。二つあることは三つあること、三つあることは無数にあることであるが、それは互に相限定しているものである。今はその二つについていうのである。AとBとの間にはMediumが入つて来ねばならぬ。これが一般的の限定である。この二つは離すことの出来ぬもので離せばなくなるのである。個物的限定と一般的の限定とは矛盾しているものであるが、そういうものから実在界は成立つてゐる。縦においてたものが時間的、直線的なものであり、横のものを空間的限定、円環的限定という。円環的限定は一般的の限定であり、時間的限定、空間的限定として我々の世界は成立つ。我々の実在界を考えるには、そういうものとして考えねば実在界というものは成り立たぬ。

我々の考えている物質的世界は物理学的の世界であつて、物と物との働く世界である。ニュートンの物理学は物と物との中に力を入れて考える。それを一つの物理的空间と考へる。物理学的の世界では物を独立とはいうが、Mにくつついて考へてるので、本当の個物を考へてゐるのではない。本当の個物は過去無限から未来無限に向つて一瞬の過去にもかえらぬ絶えざる流れでそれは物理学の世界ではない。物理学の世界にもそういう時間は根本になければならぬがこれを空間的になおして考へてゐる。空間的にはおずとは即ち時計で計るのである。そうした上の時間として始めて物理的時間となる。物理的時間は空間的の時間である。普通の空間は三次元であるが、時を考えると四次元となり、そこに四次元の幾何学が成立つ。しかし本当の実在は個物的限定、直線的限定をただ空間的限定に翻訳することでは考へられぬ。

個物というものはどこまでも自己限定という意味を含まなければならぬ。時間は独立性を有つものである。つまり生命というものが考へられて來ねばならぬ。そこでMというものは變つた意味をもつて來ねばならぬ。つまりMはかかるものを媒介するものでなくてはならぬ。



界はどういう風に発展して行くものか。

普通の人は物質の世界から人間を考えるのであるが、これは抽象的なものから人間を考えることになる。基礎的の考え方はこれを逆にいえばよいのである。個物が個物を限定するということは個物が一般的になることであり、一般的の限定が個物的限定となるということである。

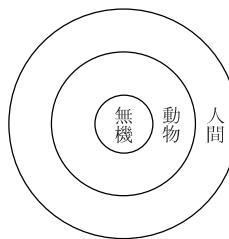
個物的限定（個物との相互限定） III—一般的限定

この前いったように個物限定は一つのものと一つのものが自己限定すると考えるのでなく、実は個物と個物との相互限定で、それが同時に一般的限定ということになる。諸君が物理学的に物と物とが働く場合を考える時に、A、Bが電気なら相引き或いは反撥するということになるのである。引く力或いは反撥する力はA、Bの両方に共通なるものである。ものが働くということは必ず対象物がある。それは即ち両方の関係しているものが自分自身を modify するのである。

AがBに働くということはBがAに働くということである。例えば二つの玉がつきあたる時に大きい玉は小さい玉をして行く、この時両方の玉が働いているのでこれはニュートンの第三の法則である。二つがつきあつた時に小さい方は動かされるが、この時は大きい方のみが働いたようであるが、小さい方も働いて今の位置になったのである。即ち力というもの(M)は双方から働いたのである。Mは一つの力の変化と考えられる。こういう風なことを力の意味は有つてゐる。

SAMPLE
Shishishinsu.com

行為の世界



そこで生命の世界になつたら、この関係はどうなるか。生命の世界もやはりこの方式によつて成立つてゐる。例えば普通に動物でもかまわない、生命を考える。その生命は一般的な物質の世界から出て来るものではない。生命は時間的なものである。生命は特殊な根源を有つてゐる。私は私の親から生れ、その親は又その親から生れ、子は私から生れ又孫は子から生れるというように考えられねばならぬ。そう考えた時に、生命は直線的に流れ行くものだと考へている。生命といふものは、自分が自分自身を限定する即ち個物が個物を限定する、アリストテレスは「個物は個物から生れる。」ということだけを生命の特色だと考へてゐる。しかし生命もやはり、一般的の関係がなくてはならぬ。私のいう一般的の限定といふものがなくてはならぬ。我々は肉体をもつていて周囲と関係することによつて生命がある。唯時間的に縦のみを考へては本当の生命とならぬ。單なる精神的生命は考へられるかも知れぬが本当の生命は外界と関係せねばならぬ。我々は食物を食う。生命は直線的に流れ去るものでなく周囲と関係を有つ。周囲は食物である。そう考へると生命も個物的限定が一般的の限定であり、「一般的の限定が個物的限定である。私の書物の生命に対する限定の所で環境的限定」ということをいつてゐるが、それは一般的の限定である。生物が生きているのは環境において生きている。生命に対し環境は食物といふ意味を有つてゐる。我々の生命はどういう風に考へるかといえば、生物が、生きたものが、自分の環境を生命化して行くことである。それは又環境が自分自身を生命化する。言い換へれば個物が一般を（自分の周囲を）個物化する。逆に一般が自分自身を個物化する、それが生命である。

生物が生きていくことは周囲のものを自分の肉体化することである。周囲のものは無機物といつてゐるものである。例ええば私が米を食う。米は単に環境であるが、私に消化されて血となり肉となり、一般的なものが個物化されて行くと同時に私の生命は環境を離れてはいない。環境が個物化することではなくてはならない。米を食うことによって生命を維持して行くので、砂を食つたでは生命の維持は出来ない。米を食うことによって生命を維持して行くので、砂を食つたでは生命の維持は出来ないわけである。環境は生命化するといふ性質を有つていねばならぬ。生命と環境とはいつでも結びついていねばならない。無論ここでこういう疑問が起るかも知れない。普通の考え方では自然を先に考へ、無機物の世界から有機物の世界が出ると考へるのであつて、たとえ生命がなくとも物質界は存在するではないかといふかも知れないが、我々の生命は環境によつてゐるのである。環境があるということはそれが個物化、生命化するといふ意味を有つていねば

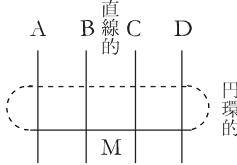
ならぬ。自然を基礎におけるべこういうことに疑問を有つかも知れないが、生命を離れた単なる自然があると考へるのでは人間の知識の立場から考へるのであって、ここに単なる動物があつて環境があるとは、ここに生命のあるということ、生命のあるということは環境のあるということである。

今日物理学でいう自然界というのは固定したものを考えるが実際はそうではなく、それは一方において我々の生命を否定するようなものである。自然といふものは人間の進歩によつて變つて行く、野蛮時代の人間も自然を考えたが、今日ではそれとはちがう。生命があるところにはじめて環境が考へられるのである。生命と環境とはいつでも結びついたものである。個物が環境を個物化すると同時に環境が自己自身を個物化する。環境と個物は一つである。

個物的限界（個物に關するの相互限界）III—藝術的限界

この関係を言葉で表せば形成作用というようなものである。ものを形づくるというのは、いつでも環境が個物化するということである。一般的なものが個物化する。或いは個物的なものが一般化する。一般と個物とが一つに結びつくこと、それが形成作用である。主觀が客觀を主觀化する或いは客觀が主觀を客觀化する、こういう言葉はわかり悪いかも知れないがこれが形成作用である。例えは芸術家の芸術的創作作用を考えると、彫刻家が大理石の像を彫つた、それはどういうことか。大理石の像是芸術家の頭の中に既に像としてなければならぬ。ギリシャ的にいえば形相がなくてはならぬ。ミケランジェロがダビットの像を作つたという時に、ミケランジェロの頭の中にある像は主觀であつて、大理石の像は客觀である。大理石の像はミケランジェロの頭の中にある像即ち形相が客觀的に表れたもの即ち形づくられたのである。大理石は一つの形を有つたものではあるが像になつた時にはじめて形成されたのである。形づくられたということは主觀が客觀を主觀化したのである。形相即ち頭の中になつたものが全く主觀を離れた客觀を主觀化したのである。普通にはそれだけしか考へないが、客觀が主觀を客觀化する方面を考へねばならぬ。ストーブの鉄は客觀的なもので職人が頭の中にあつた形相に従つて作つたのである。環境を個物が個物化したものである。一般的の世界を個物化したものである。普通にはこれだけ考へるが逆に客觀が主觀を客觀化する。こいつは一寸わかり悪いかも知れぬが、例えはミケランジェロがダビットの像を刻んだという時に、形相といふものは、その頭の中にある。こう云えばそれは全く主觀的のものだと普通の人は思つてゐるかも知れぬ。しかし本当の芸術作品はそうして出来たものではない。ミケランジェロがダビットの像を作るという場合、ミケランジェロは自分といふものを失つて、芸術

行為の世界



我々の生命はこんな方式でなり立っているものだと思う。これで我々の生命は考えられている。生命の世界はいつでもこういうものとして考えられているのである。だからそこでいうMは上の個物的限定即一般的の限定の意味をもつてゐる。

A、B、C、D……は縦の限定でこれは個物的限定であり直線的であるが、これを媒介するMは円環的な意味を有するねばならぬ。

生命はいつでも時間的でなくてはならぬ。同時に空間的でなくてはならぬ。生物は一方直線的であり、一方円環的である。一方時間的であり、一方空間的である。一方縦であると共に横である。そこにbodyが形成せられるのである。しかしそういう生物の世界はまだ本当の実在界というものではない。どういう意味かといふと縦の限定（個物的限定）がまだ横の限定（円環的限定）にくつづいている。肉体にくつづいた生命であり、客觀に個物的なものを入れたにすぎないと考えられるものである。縦と横が本当に一つになつたものではない。生物の生命はまだ本当の時間的

作品が向うから表れて来なければならないのである。

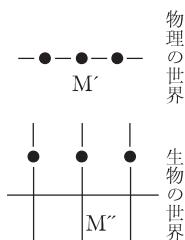
普通には主觀が客觀を主觀化すると考へるがしかし客觀が主觀を客觀化するのである。それが大事なことである。芸術の作品は芸術家の主觀ではない。主觀が主觀を失つて客觀になることで、それが大事の点である。単に主觀が客觀を主觀化する、個物が一般を個物化する、これが逆にいくということは、本当の芸術家は自分をなくして、即ち自分の主觀をなくして、客觀にならねばならぬということである。天籟とか、恍惚とかいわれるもそこにあるのである。即ち向うのものが自分を奪つて客觀化する。本当の形作作用はそういうものでなくてはならぬ。

我々の生命というのもそうである。極く平凡な生命を考えても、生きるために周囲を主觀化する時に、自分の意志は消えて生命は向うから自分で出て来るものである。例えれば生きるために食物を取り、取った食物が、我々の生命を生かすのである。普通には客觀を軽く考へている。客觀はどうにでもなるものだ。どんな材料でも生命を生かすことが出来ると言えるがそうではない。客觀化する作用をよく考えて見なければならない。特に今いった芸術的創作作用のようになると、向うのものが自分を動かし、自分が客觀に従うことになるのである。

個物的限定（個物的・圓環的の相互限定）Ⅱ—體育篇

なものにはなつてない。空間にくつついたものである。

個物は独立なもの自分自身が他から限定されないので、自分が自分を限定するものである。スピノザのエチカの一番始めにサブスタンスを定義して、それ自身に成立っているもの、理解されるもの、自分自身の原因 Causa sui これが個物となるといつてある。本当の生命は独立のもので決して他から出て来ない。肉体的生命はそういう風には考えられぬ。個物的なものは、人格的自己といふものでなくてはならぬ。物理的世界といふものでも個物的限定が一般的限定、一般的限定が個物的限定の意味を有つてゐるもので、その意味では独立な実在界と考えられるかも知れないが、物理的世界の個物は空間にくつついて考えられたものにすぎない。外に見ている世界である。生物の世界になると A が図のように延びて来る。我々は肉体を有つている限り生物の世界にあるが、それでも真に独立の世界でなく、空間にくつついて考えている。



眞に独立なものは全く他から限定されない眞に自由なるもの即ち人格的自己といふものであつて、これが眞の個物といふものである。本当の実在界は人格的自己と自己との相互限定の世界ということになる。人と人との結びつき、そういう世界であるからMというものは物理の世界のM'、生物の世界M'、我々の人格の世界のM'など深まって行く。M'が人格的自己の世界で社会的・歴史的世界といつてよい。それが本当の具体的世界といつてよい。それから物質的世界、生物の世界が考えられるのである。人格的世界においては

個物的限定（個物と個物との相互限定）≡一般的の限定

の式の両方、個物的限定と一般的限定とが同等の意味を有つて来る。同等の権利を有つて来る。個物的限定の意味は時間的なもので、個物的限定の意味を段々に一般的限定に結びつけることによつて物理の世界が出来たり、生物の世界が出来たりするのである。本当の個物は人格的自己である。これは全く独立なものである。独立なものは必ず相互に関係する、一人だけの人格はあり得ない。私と汝は全く独立なのであるが。私は汝に対して私である。汝がなければ私もない。私というものが一つころつとあつたでは、私でもなんでもない。私は他に対立することによつて私となるのである。普通にはそう考えられていない。これ迄の哲学は私から出立している。デカルトが「我思う故に